

## 〈論文〉

## 創造する天使達

## ——ボルヘスとホイットマン——

宮下克子

## はじめに

ボルヘスは世界のあらゆる物を距離をおいて眺めていた。言わば、「鏡の向こう側」から見ていたのである。実際、裸の指でそれに触れてみようとしなかった。肌を焼くかもしれない熱さ、指先を刺すかもしれない刺を恐れた。柄谷行人はヴェンダースの映画『ベルリン・天使の詩』に登場する天使達について、次のように書いている。

天使として描かれているけれども、彼らはある種の人間のことだといつてよい。それは実践家ではなく、認識者であり、どんな人間の実践にも物語にも幻滅したがゆえに二度とそれに加担することなく、ただ実践が何も生み出さないことを認識するためだけに生きている、というようなタイプの認識者なのです。(略) 天使達自身は何も「経験」しないし、「知覚」しない。彼らが把握するのは、いわば「形式」だけなのです。彼らは人間の歴史をずっと見てきているが、一度も生きたことがない。さらに彼らにとって、歴史はたんに形式の変形でしかなく、なにごともしこころでは起こらない。つまり歴史が存在しないのです<sup>1)</sup>。

この、永遠の認識者としての天使の姿と、バラカスでのある夜、散歩にでた街角で「この世界の抽象化された観察者」であるかのように感じている若き日のボルヘスとの間の距離は、そう遠くない<sup>2)</sup>。作家が抱き続けた非現実感、非個人性、時間の本質へのこだわり等は、全てこうした天使と

しての生き方の現れと言っている。ボルヘスは常に天上の無時間の、「形式」のみが存在する世界に目を向け、こだわってきた。が、一方で「人間」になることにも絶えず熱い憧れを持ち続けた。ヴェンダースの天使ダミエルは人間の女性に恋して翼を捨てるが、ボルヘスはどのようにして地上に降りようと試みたのか。

本稿ではウォルト・ホイットマンとの関わりを追いながら、こうしたテーマに取り組んでみたい。ボルヘスはヨーロッパで過ごした青年時代から、ホイットマンを愛し、この詩人に常に最大級の賛辞を贈ってきた。他の国の文学と比べ、彼が英語圏の文学を特に高く、時として過大に評価したことを考慮しても、その打ち込み方には何か特別なものが感じられる。なぜボルヘスはそれ程に高くこの詩人を評価したのか。ホイットマンもまた、ひとりの天使ではなかったのか。

第一章では両者の実際の人生の跡をたどりながら、二人の肖像に天使の面影を探してみる。第二章では、ボルヘスの詩や短編に登場するホイットマン像から、ボルヘスがこの詩人の内に何を認め、何を求めたかを考える。最後の章では、実際に『草の葉』を検討し、両者において共通するもの相違するものを見極めつつ、ボルヘスがいかにして人間になろうとしたか、その道を辿ってみたい。

## 第一章

E. R. モネガルはパスとボルヘスを比較し、パスが「知的活動を常により広くより変化ある社会状況の中に置き」「決して政治的・人間的掛かり合いから目を背けなかった」のに対し、「ボルヘスの抗議や政治参加は常に言葉の上であった」と書いている<sup>3)</sup>。こうした考え方を考慮しつつ、彼の書いたボルヘスの伝記を読むと、一人の人間としてのボルヘスを見るモネガルのスタンスは一貫しているように思える。それは、「すべてが言葉の洞窟の壁に映った影や、影の反映であるような現実の中で生きている」<sup>4)</sup>人間の姿である。モネガルはどこからこうしたボルヘス像を導きだした

のか。

ボルヘスは1937年から46年にかけてミゲル・カネ図書館で第一補佐として勤めたが、そこでの出来事のひとつとしてモネガルが載せているエピソードは彼の伝記に描かれている作家の肖像を端的に表わしていて興味深い。ある日、トイレの中で同僚のひとりがシャツをめくりあげて胸の傷を見せた。それは決闘が残したナイフの傷跡であった。それを見たボルヘスは「ひどく嫌な気がした」という。1920年代から30年代の初めにかけて彼は場末のならず者達、娼家、決闘等を好んで扱った作品を書いていた。そこには暴力と死が横溢していたが、実際にそうした暴力の跡を目にするとたちまち不快になり、たじろいでしまうのである。自分のいない場所（場末や決闘や死）に対する憧れや郷愁が結ぶイメージと現実の間には大きな隔たりがあった。

時代を少し戻そう。1914年、一家は父親の失明・退職を機にヨーロッパに渡り、スイスに居を構える。ボルヘスはジュネーブとルガーノで感じ易い思春期を過ごす。この間初めて「歴史」を目の当りにする。ヨーロッパは第一次世界大戦を生きていた。ボルヘスはそこで表現主義の詩に触れ、彼らの、東洋哲学や世界を結ぶ兄弟愛に対する深く真剣な関心に共鳴する。特にヨハネス・ベツヒャー、ヴァイルヘルム・クレム、エルネスト・シュタードラー、アウグスト・シュトラムに強く惹かれたが、彼らの多くが前線で戦死した。

ボルヘスは『異端審問』(*Inquisiciones*)に収められた表現主義に関するエッセイ (*Acerca del Expresionismo*) の中で、彼らの詩の際立った特徴として「激しさ」をあげている。その激しさの原因は戦争にあった。詩人達にとって戦争は真に強烈な体験であった。ボルヘスは彼らが死に直面しながら、正に戦場のただなかで恐れと痛みと生へのいとおしみを文字に書き写す様を熱した口調で語っている。己れの実生活に欠けている激しさを求めて場末のならず者達の世界を描いていくボルヘスだったが、聞き書きでは達し得ない境地を彼らの詩の中に見いだしたにちがいない。

また、同じエッセイの後半でボルヘスは人間を思考タイプの人間と感覚的な人間の二種類に分け、両者の表現の方法を比較している。前者は外部の世界を実体の無い観念をもって表現しようとし、後者は観念に形を与え実体化しようとする。ボルヘスは前者の例としてゲーテをあげ、後者の例として聖書をあげている。そして表現主義を後者の系譜に名を連ねるものとしている。抽象の世界、観念の世界に生きるボルヘスは明かに前者のタイプに属し、後者のタイプに憧れを抱いている。

モネガルはスイス時代のボルヘスが二重の意味で亡命者であった、と書いている。すなわち、彼はアルゼンチン人でありながらヨーロッパに生きる異邦人であり、同時に、実際欧州に住んでいたにもかかわらず、その現実からも隔たっていたのである。ボルヘスは中立国に住む異邦人として、確かに欧州に吹く戦火の風を身に感じてはいたが、戦争を体験することはありえないことだった。言わば、頭上を流れていく「歴史」の重い雲が地面に映す黒い影を見ていたのである。彼はその若々しい心で「歴史」の激しい息吹を感じながら、そこに参加することはできなかった。彼にとって表現主義の詩に深く親しむことは、自らは経験できない戦場での決死の戦いを擬似体験することであった。

1921年、一家は七年間離れていた故郷ブエノス・アイレスに戻ってくる。ボルヘスはヨーロッパで抑圧されていた若々しい感情を一気に解放する。彼は自分の場所に帰ってきた。もはや異邦人ではない。当時の彼の文学活動は非常に活発であり、この時期はある意味でボルヘスが最も熱していた時代であった。また、20年代の終わりにイポリト・イリゴージェンが大統領再選をめざしてキャンペーンを始めた時には目だった働きをした。モネガルはこの折の彼の行動を「ボルヘスの政治活動家としての思いがけない一面」を垣間見させるものとしている。選挙では政敵による不正な操作が予想され、ボルヘスはユリーズ・プティ・ドウ・ミュラ等と共に青年知識人委員会の支部を結成する。多くの青年が政治から距離をおいて静観する中、彼らは、委員会との一切の繋がりを断つと宣言した雑誌『マルティ

ン・フィエロ』の活動に参加することをやめる。しかし、この政治への情熱もイリゴージェンが当選し、その第二次政権が発足すると急速に冷めていった。友人に宛てた手紙の中でも、『スル』に寄せた記事においても政治に対する幻滅と皮肉に満ちた言葉を並べている。

以来、ボルヘスは政治に関わることをやめるが、第二次大戦時のみ強い反応を示した。36年9月、ブエノス・アイレスにおいてペンクラブの国際会議が開かれた。会議ではトマソ・マリネッティ等ファシズムに共鳴する陣営と、リベラルなフランス人やユダヤ人作家の間に激しい対立が起こった。ビクトリア・オカンポ等が積極的に会議に参加したのに対し、ボルヘスは参加しなかった。が、『エル・オガール』や『ギア・デ・レクトゥラス』に反ファシズムの立場から政治的な意見やイデオロギーに関する論説を寄稿していた。

1939年、ウルグアイ沖でドイツの戦艦と英国の巡洋艦の衝突が起きる。ボルヘスは当初から英国への支持を明確に表明した。中流上流の英国からの移民の子孫である多くの若者が英国を救おうと発っていったが、すでに40才に近く、視力も著しく低下していたボルヘスはこうした行動にはでられず、かわりに第三帝国を非難する記事を雑誌に載せた。

1946年、ペロン将軍が権力を握ると、反全体主義の立場から明確な反ペロンの姿勢を表明する。8月、ミゲル・カネ図書館からコルドバ通りの公共市場の家禽や兎の検査官への移動を命じられる。しかも、それは昇格という形をとっていた。

1948年、婦人のグループが無許可でフロリダ通りに集まり国歌を歌いビラをまいたため、警察に検挙された。その中にボルヘスの母親と妹のノラがいた。ノラは一カ月間、牢に拘留された。後にボルヘスはそのことを対談の中で誇らしげに語っている。

「ノラは私にこう言いました。『祖父は祖国のために死に、曾祖父はスペイン人と戦ったわ。彼らは祖国のためにできる事は全てしたのです。私も牢に入ったということだけで同じ事ができたんだわ』と。本当にそうだと思います。』<sup>5)</sup>

ボルヘスはおそらくノラを尊敬し、たぶん幾らか羨んだにちがいない。自分の身にも同じ事が起こってくれたらと望んだはずである。モネガルは「ペロニズムの時代におそらくボルヘスは（『南部』の）ダールマンと同じように感じ、同じように男らしい結末を迎えることを夢見たはずである」と書いている。同様に、『待つ』の主人公のように、ボルヘスも警察がやって来て彼を連行するのを待っていた、と推測する。他の著名な作家が敢えて政府に反旗を翻そうとせず背を向けていたのに対し、ボルヘスは孤独な戦いを続けた。独裁者の暗殺を擁護する内容をもりこんだ詩を書きさえした。しかし、ペロンはついに彼を男らしい闘いの場に誘うことをせず、家禽と兎の検査官に「昇格」させるという屈辱的な方法しかとらななかった。おそらく、この時代にボルヘスは外部からの抑圧と同時に内なる抑圧にも悩まされていただろう。憎むべき敵に対して雄々しい闘いを挑めない自分へのはがゆさと恥ずかしさを抱き続けることで内側においても鬱屈した状態にあったはずである。ペロンの時代、彼は自由な精神と勇敢さを持ち続け闘い続けたが、それは彼が望んだ形においてではなかった。現実も、ボルヘスの性格も肉体もそれを許さなかった。このように、現実に参加したい、活動的・行動的男でありたいというボルヘスの思いは消化不良、不完全燃焼に終わる。

こうした傾向はより私的な面においても見られる。母親によると、ボルヘスは若くて美しい女性に対して非常に敏感で、常に、短い周期で、激しく恋していたという。だが、ボルヘスの恋愛には非現実感がつきまとう。その一例としてモネガルは興味深いエピソードを載せている。30年代の半ばにボルヘスはある女性に恋し、その叶わぬ思いを二編の英語の詩に託して歌った。最初それらは I. J. というイニシャルの女性に捧げられたが、後に、このイニシャルは S. D. に変えられ、さらに1954年の全集では他の女性に捧げられている<sup>6)</sup>。これは、どう説明されるのか。「全ての犬は同一の一匹の犬と考えていたボルヘスが、全てのベアトリーチェはひとりのベアトリーチェと思ったとしてもおかしくはない。彼にとって、名前とか、

イニシャルとかいうものは、たいした意味を持っていない」とモネガルは解釈している。

また、ある対談では「個人的に知り合ったひとりの女性の美しさよりも、トロイヤのヘレネの美しさにより感謝する」<sup>7)</sup>と述べている。目の前のやがては衰え、朽ちていく肉体を持った女性のうつろい易い美よりも、無時間の、永遠の中に生きるヘレネの絶対的な美のほうが自分にとっては意味が大きい、と言うのであろう。こうした言葉の中に、現実の時間と相対して生きることへの拒否を感じずにはいられない。

次にホイットマンの場合を見てみよう。「ホイットマンは未婚で子供がなかった。子供を通して人生を生きる片親のように彼は『草の葉』を通して現実には見るできない経験を生きることになる。」*Walt Whitman*<sup>8)</sup>の第一章“The Mask of Whitman”はこのように始まる。この冒頭の文を読むと、ボルヘスがホイットマンの世界観と詩人像に大きな好感を寄せていただけでなく、その人生の在り方にもまた、似通った点を認めていたのではないかという思いが強くなる。

ホイットマンは1819年、ニューヨーク州ロングアイランドで大工の子として生まれた。11歳で学校をやめ、法律事務所や医者の家での使い走り、植字工などの仕事をして働いた後、故郷の様々な学校で教鞭をとる。その後、『ニュー・ワールド紙』の植字工になったのをきっかけに、20代の青年期はずっと、ニューヨーク、ブルックリン、ニューオーリンズの多くの民主党系の新聞で政治ジャーナリトとして活躍した。この時期のホイットマンは熱烈な民主党員として活発な動きを見せている。40年の大統領選挙では民主党の候補者のために積極的に働き、大勢の聴衆を前に演説までした。

1846-48年のメキシコ戦争の結果、アメリカは西部の広大な土地を入手するが、この土地を奴隷州とするか自由州とするかをめぐり民主党は分裂する。ホイットマンは自由州説を主張して『自由土地党』を結成した小数派に属したが、大統領選に敗れると党員の多くは妥協して主流派に戻って

しまう。彼はこの妥協が受け入れられず、政党政治の実態に幻滅する。

ここまでのホイットマンは気紛れでボヘミアンでありながら情熱的な政治青年で、故国を愛し、その発展に無限の期待を寄せ、歴史の最前線で現実に参加しようとしている。しかし、この幻滅を経験した後は少しずつ変わっていく。以後、彼は政治・政党に対する冷笑的で皮肉な詩を新聞に発表する。そこには、「自ら政党あるいは政治の改革に参加しようという態度は見られない」<sup>9)</sup>。

その後、ホイットマンは10年間深く関わってきた政治の世界から抜けだし、51年にはブルックリンに建てた家で印刷所と書店を経営する。この間、打ちのめされ萎えていたデモクラシーの理想が彼の内で詩的創造として再生していった。その結実が55年に出版された『草の葉』であった。しかし、南北戦争が近づき社会の混乱が深まるにつれ、ホイットマンの理想とアメリカの現実の間のギャップは益々大きくなる。彼は必死で詩の中のヴィジョンと現実とのギャップを埋めようとするが、困難を極め、彼自身の内に分裂が生じる。「ホイットマンは現実への関心をやめてしまったのではない」<sup>10)</sup>が、『草の葉』の第3版では「詩人の態度が現実に対して積極性を失って来ている」<sup>11)</sup>。このように現実的・実践的ホイットマンは次第に後退し、現実に対して受け身となり、一種宗教的な世界へ傾倒していく。つまり彼は「現実的な世界を去っていかうとして」<sup>12)</sup>いたのだった。

1861年南北戦争が始まる。62年、弟ジョージが負傷したと聞き、ヴァージニアの前線に出かける。負傷兵と共にワシントンまで後退したホイットマンは市内の病院で彼等の世話をする。当時、彼は正に歴史の先端で生きていたかに見える。だがやはり、そうではなかった。65年の『草の葉』第4版の「軍鼓のひびき」では次のように歌われている。

腰の曲がりかかった老人になれば、わたしは新しい仲間の群れに立ちまじり／ねえ話してよお爺さん、とわたしを愛する若者たちや娘たちが求めれば／さらに答えて過ぎし昔を振り返りつつ、ふたたびわたしは語り始める<sup>13)</sup>。

ホイットマンはまだ40を幾つか越えたばかり。徐々に体の不調を訴える

ようになってはいたが、腰の曲がる年ではない。だが、詩の中のホイットマンは自身をすでに戦闘能力の無い老人として描く他なかった。「憤然として奮起し、警鐘を打ち鳴らして容赦なき戦いを促そうと思いはしたが」<sup>14)</sup>、現実には「負傷兵たちのそばに座って彼らを慰め、あるいは黙ったままで死者たちのお通夜をした」<sup>15)</sup>のみであった。また「過ぎし昔を振り返って」も、彼がそのような雄々しい戦いを戦ったことは一度もない。同じ詩の中から、

おお、わたしが愛し、わたしを愛する娘たちよ、／君らの尋ねるわたしの昔が、このうえなく異常で唐突だったあのかずかずの出来事が、君らの話で蘇る／わたしは機敏なひとりの兵士、長い行軍の果てに汗と埃にまみれつつ戦場に到達する／時まさに好機、勇んでわたしは戦闘に飛びこみ、激しく突撃しては敵を敗走させつつ大声で叫び／わが手に落ちた敵の陣地に乗りこんでいく<sup>16)</sup>

しかし、「流れる急流のようにこうした記憶は薄れていき」<sup>17)</sup>、「包帯とガーゼを持って／ひたむきに、脇目もふらずにわたしはわたしの負傷兵のところへ急ぐ」<sup>18)</sup>のである。ホイットマンは戦場の隣で生きていたが、やはり、傍観者であった。「勇んで戦闘に飛びこむ」ことは望んでもできないことであった。こうして我々の眼前には、戦場で戦うことを夢見ながら、日々負傷兵を見舞い、看護の手伝いに精を出し、父として兄として死にゆく若者達を慰め、その旅立ちを静かに見守ることしかできなかった詩人の姿が浮かびあがってくる。その姿は男らしい闘いを願いながら、結局ペンでしか生きられなかったボルヘスの姿と重ねあわせることができる。

この戦争を経て、ホイットマンは一層現実から離れていく。戦争後の社会は北部の産業主義的体制が主流であり、彼の抱いていた民主主義の理念とは掛け離れていた。詩人はその理念の実現を「死」の中に夢見る他なかった。これは、「彼の政治からの、また現実からのほとんど全面的な退却を意味していた」<sup>19)</sup>。

ホイットマンは彼の時代の病患にはほとんど平気であったように思える。彼は時間の中に生きていたのではなく、一種の精神的充足の中に生きていた<sup>20)</sup>。

亀井氏が著書の中で引用しているヘンリー・ミラーの言葉を借用した。ミラーは、四面を包囲されているヨーロッパ人は常に敵か味方かであり、「参加」することを余儀なくされるが、アメリカ人にはこうした世界市民的な態度が可能である、と述べている。ボルヘスもまた、ひとりの世界市民として「参加」しない生き方を選んだのではないだろうか。

また、ホイットマンの愛は『草の葉』の「カラムス」詩に読み取れるように、同性の愛であったと言われる。かつてニューオーリンズに住んでいた頃、ある婦人と恋に落ち、子供までもうけたというような話もあるが、何の証もないという。また、『草の葉』を読んで感銘を受け熱烈なファンとなったイギリス婦人がはるばるホイットマンを慕って合衆国を訪れた際も無関心で曖昧な態度で通した。こうした女性に関するエピソードは皆、謎のヴェールに包まれていてはつきりした形を表わさない。

彼の実生活には、その主張するとき性の解放はみられない。頑健な肉体を持った彼は、その実践の代償として性詩を生んだ<sup>21)</sup>

このような現実性の薄い愛はボルヘスと次々に変わっていくガールフレンドや取り巻きの女性達との関係を連想させる。

ここまでボルヘスとホイットマンの足跡を追ってきたが、両者の参加しない（できない）生き方、歴史の無い無地間を生きる天使のような在り方が跡付けられたと思う。次の章ではボルヘスが詩人の何に惹かれたのか具体的に考えてみたい。

## 第二章

ボルヘスが最初にホイットマンの詩に出会ったのは前章でも触れたスイス滞在中の表現主義の詩人との関わりの中であった。ある日ボルヘスは表現主義の年報に載ったJ. シュラーフによるドイツ語訳の『草の葉』に目を留め、わざわざロンドンに注文して原文の詩集を入手する。後に自伝の中で追憶し、「一時期、私はホイットマンを単に偉大な詩人というだけでなく、唯一の詩人と考えていた」と書いている。

ホイットマンを最初にドイツで紹介したのは、1868年のF. フライリヒラートの論文で、彼はその中でホイットマンの言葉にバイブルの響きを認め、詩人を一個の預言者として捉えた。もっと後に、K. クノルツ等がホイットマンの神秘的・浪漫主義的思想家としての面を探究した。これはドイツの伝統と合致したためホイットマンは広くドイツの思想・文学に組み入れられた。90年代に入ると、J. シュラーフとA. ホルツがホイットマンの訳詩に精を出し、彼について多くを書いた。20世紀初頭のドイツには一種のホイットマンのブームが巻き起こりつつあった。第一次大戦が始まるとドイツにおけるホイットマンの評価はさらに高まった。それは彼が身を持って戦争の悲惨さを体験したからであり、戦争のさ中で命の危険に晒された若者達は彼の詩に慰めを見だし、指導者として崇めた。そして彼らはホイットマンから「極めて激しい表現法—表現主義の詩法—を学びとった」<sup>22)</sup>。

こうしたブームの中でボルヘスはホイットマンを発見し、その影響を受けた。彼を自由詩の創始者と見なし、自らの詩の中にも常にその影を求めた。そしてその賛美の思いは年を経ても変わらなかった。1969年版の『ブエノス・アイレスの熱狂』の序において23年（初版）当時の自分と現在の自分を比較し「我々は全く同じである。二人ともショーペンハウエルとステイーブンソンとホイットマンの信徒である」と書いている。もっとも『虎の黄金』（1972年）の序ではこの詩人のカタログ用法の詩的效果を疑問視し、「真の詩人にとって人生の全ての瞬間・事象が詩的なものとなりうる。（略）私の知る限りブラウニングとブレイクがそうした高い境地に最も近づいた。ホイットマンも努力したが彼の考え抜かれた事物の列挙はしばしば無味乾燥なカタログになってしまっている」と書いている。

しかしボルヘスの詩の中には無味乾燥と評されるこのカタログ用法が繰り返し用いられているしホイットマンの名前も度々現れる。例えば“Lineas que puede haber escrito y perdido hacia 1922”（『ブエノス・アイレスの熱狂』）では、「落日の場末の静かなる闘い」に始まって多くの思い

出や事象が並べられ、その中にホイットマンの姿も見られる (Walt Whitman, cuyo nombre es el universo<sup>23)</sup>)。ホイットマンは宇宙そのものであり「私」自身もこれら列挙した全ての事象と同一ではないか、とボルヘスは問う。詩法も万物一元の思想もホイットマンのものである (“soy yo esas cosas y las otras/ o son llaves secretas y arduas algebras/ de lo que no sabremos nunca<sup>24)</sup>”。

“Camden, 1892” (『他者と自身』) では、死を間近にしたホイットマンの貧しい部屋の情景が描かれる。年老い疲れきった詩人の姿のどこにも『草の葉』の主人公ウォールトの面影はない (Casi no soy, pero mis versos ritman/ La vida y su esplendor. Yo fui Walt Whitman<sup>25)</sup>)。『草の葉』のヒーローと作者のホイットマンとは別人である。前者は生の喜びに溢れ、後者は何者でもなくほとんど存在しないも同然である。

“On his blindness” (『虎の黄金』) では、ほとんど盲目となったボルヘスがもう自分は星や小鳥や活字を見るには値しない存在になってしまったと歌う。しかし今でも千夜一夜物語やホイットマンを味わうには値する、と愛情と哀しみを込めて歌っている ([Soy] Indigno de los astros y del ave (. . .)/ Soy, pero no de las Mil Noches y Una (. . .)/ Ni de Whitman, ese Adán que nombra/Las creaturas que son bajo la luna<sup>26)</sup>)。光を失った今でもホイットマンへの敬意は変わらない。

“El pasado” (『虎の黄金』) では世界の歴史に刻まれた過去の出来事が列挙される。その中にブルックリンの編集室で机に向かうホイットマンの姿もある。この詩には彼の本質が在る。新聞記者のホイットマンと『草の葉』のウォールトは掛け離れている。ホイットマンの意図は実に遠大で、煙とインクの匂いが充満する殺風景な編集室に居ながら全時間における豊かな全世界を創造することであった (Whitman, que en una redacción de Brooklyn,/ Entre el olor a tinta y a tabaco,/ Toma y no dice a nadie la infinita/ Resolución de ser todos los hombres/ Y de escribir un libro que sea todos;<sup>27)</sup>)。

次にホイットマンに言及した三つのエッセイを見てみよう。

“La nadería de la personalidad” (*Inquisiciones*) ここでボルヘスは総体としての「自己」の徹底した否定を試みている。記憶や連続する精神の状態の蓄積、知覚、肉体、願望、思想、感情、意識、そのいずれも「私」ではない。また、「今」において状況的にのみ「私」は存在し、過去の全ての時の自分を背負い、未来の自分を内包するような「自己」は存在しない。ボルヘスによるとホイットマンはこうした総体化を許さない、一瞬一瞬に現れ出ては消える事象を一身に背負って立とうとした最初のアトラスであった。このホイットマンのアトラスとしての仕事は『アレフ』のカルロス・アルヘンティーノ・ダネリの詩作を連想させる。ダネリは旅など不必要で、書斎に居ながら全てを見、聞き、それを詩に表してみせると豪語するが、これは先に言及した詩“El pasado”で歌われた編集室にいながら全世界を創造しようとしたホイットマンの意図そのものである。またダネリの詩の序歌は、「聖書に淵源を見る言葉の列挙や積み重ねといった手法」を用いて書かれているが、この手法は正にホイットマンが『草の葉』で好んで用いたものであった。

“El otro Whitman” (*Discusión*)。タイトルが示す通り、ここでボルヘスはホイットマンの二面性、『草の葉』の詩に現れる詩人の二面性について書いている。ひとつの面は冒頭で述べられる「圧倒的な強さ」を有する強烈な個性の人としての面であり、もうひとつはボルヘスによると「震えるような簡潔な表現」を持ち「生の捉え難さ、貧しさ、慎ましさとその欠如の感覚」を表現する詩人としての面である。第一の面は主人公のヒーロー、ウォールトが有する質であり、第二の面はホイットマンその人の本質としてボルヘスが認める質にちがいない。この質は「ボルヘスとわたし」の「わたし」、ブエノス・アイレスの街を散策し、砂時計やコーヒーの香りを密かに楽しむ「私人」としてのボルヘスに通じる。

“Nota sobre Walt Whitman” (*Discusión*)。このエッセイの前半でボルヘスはことさら『草の葉』のウォールトと作者ホイットマンとの違いを強調

する。さえない非行動的な作家ホイットマン、ボルヘスによって“hombre de letras”, “el pobre literato” と呼ばれる詩人は鏡を前に立つボルヘス自身の姿である。またボルヘスが抱いているホイットマンのイメージ (casto, reservado y más bien taciturno) は亀井氏が描く詩人の実像とはかなり異なっている<sup>28)</sup>。むしろこのイメージはボルヘス自身に当てはまる。一方、詩の中のウォルトに与えられる形容詞は“el amistoso y el elocuente salvaje”であり“efusivo y orgiástico”であって、こうした表現からは非常に奔放で行動的で性的にも強い魅力を持った英雄的な男性像が浮かび上がってくる。これはボルヘスが常になりたいと願ひ、決してなれなかったエピック・ヒーローの姿であった。

またボルヘスはウォルトとホイットマンの間の隔たりを例を挙げて説明しながら「大切なのは、詩の中の幸福な放浪者には『草の葉』は書けなかっただろうということだ」と述べている。対談の中で「あらゆる作品は不幸から生まれる」と語り<sup>29)</sup>、「私は幸福ではなかった」<sup>30)</sup>と詩に詠んだことともあるボルヘスには、不幸で恵まれないホイットマンが『草の葉』を編んでいった過程が手に取るように理解できたはずだ。この、欠如を補おうとする哀しい欲求は両者に共通していた。

エッセイの後半はホイットマンがいかにして己れの詩人としての永遠を手に入れたかが語られる。それはボルヘスには馴染み深いテーマ、汎神論と関わってくる。古来、神の全能・偏在を証明するために多くの哲学者・神学者が用いた手法をホイットマンは革新した、とボルヘスは言う。矛盾形容語法を用いたボルヘスの表現によると彼は「残忍な優しさをもって」全ての人々と同化しようとした。この手法の例としてボルヘスが示す最初の例は、過去の「歴史や神話における」ホイットマンの現れである。

He sido terco, vanidoso, ávido, superficial, astuto, cobarde, maligno;<sup>31)</sup>

詩人は自らが全ての過去と同一であり過去の全ての苦悩を自らのものと感ずる、と歌う。その表現には確かに「残忍な優しさ」があり、一種の暗い陶醉がある。

次の例は現に「今」を生きているホイットマンの姿であり、「現在」を表している。

Walt Whitman, un cosmos, hijo de Manhattan,/  
Turbulento, carnal,  
sensual,<sup>32)</sup>

これに続く引用は「未来」のホイットマンを表している。

A ti, dentro de un siglo o de muchos siglos/  
A ti, que no has nacido, te  
busco./ Estás leyéndome.(. . .)/ Ahora eres tú, (. . .) el que intuye los  
versos y el que me busca,/  
Pensando lo feliz que sería si yo pudiera  
ser tu compañero.<sup>33)</sup>

ホイットマンは死した後も未来の彼の読者の中に蘇り続ける。これは正にボルヘスが「不死性」と題した講演で語っている望ましい不死の在り方である<sup>34)</sup>。その不死性は非個人的なもので、宇宙の歴史の完成に少しでも役立つことにより勝ち取られる。こうしてボルヘスは自らの詩に自らの不死を託す。その意味でホイットマンは彼の手本であった。また、上で見たようにホイットマンの中には過去・現在・未来の三つの時間が同時にある。これはボルヘスが常に求めた永遠の在り方でもあった。

ここまでホイットマンを扱った詩とエッセイを見てきたが、重要な点が三つある。ひとつはボルヘスが宇宙を、その過去と現在と未来の全様相において描ききろう、把握しきろうと意図する時、必ずこの詩人の姿を頭に置いていたということである。二番目のポイントはボルヘスがホイットマンの中に常に二重性を見ていたということだ。この二重性はボルヘス自身の二重性でもあった。彼が詩人に強い親しみを抱くのはおそらくそのためである。実際のホイットマンは（結果的に）行動力を持たないペンと本で生きる人間であった。彼はただ想像の中でのみ、小さな自分から解放され、無私の男性的なヒーローとして生きられた。

第三の、最後の点は個の否定の概念との関わりである。この概念はヒューム、バークレー、ショーペンハウエル等の観念論について父親と繰り返し討議するうちにボルヘスの中に育ち深く根を張った思想であった。が、同時にそれは時代の要請でもあった。前にも触れたが、ボルヘスは今

世紀初頭の欧州で感じ易い青春時代を過ごした。そこではニーチェが若い文学者や芸術家に大きな影響を及ぼしていた。ニーチェがもたらした画期的な思想の中に自我の統一性の崩壊があった<sup>35)</sup>。ボルヘスがホイットマンを知るきっかけとなった表現主義の詩人達もまたニーチェの影響を受け、その「自我の多様性、非連続性、解体というテーマ」<sup>36)</sup>を多く取り上げた。当時ドイツではホイットマンに対する関心も高く、J. シュラーフ等はニーチェとこの詩人を並べ比較して論じた<sup>37)</sup>。ボルヘスもまた時代の子であり、後にホイットマンを語る折はニーチェを引き合いに出し、ニーチェを論じる時にはホイットマンを引用するというように、常に彼の意識の中でこの二人は並んで位置していた。『モダニズム研究』の「言語危機論」において著者はニーチェの「個人の放棄の快感」(多における生、個人なるものの外で(略)感じられる快。現象するものと自分をひとつに感じること<sup>38)</sup>)とマラルメの「主体の消滅」を比較している。

前者の場合(マラルメ)は個人を放棄するのだが、後者の場合(ニーチェ)は個人が外部を非外部化するのである。現象するもとの一体となることは自己を脱却すること(略)と同時に現象する多である他を個体にとって必然的な内的なものとして把握する過程を含んでいるはずである<sup>39)</sup>。

これを読むとニーチェの目指す自己に外界を取り入れる過程は、ホイットマンがヴィジョンとなって全時代のあらゆるものの上を翔び回って自己と同一化していく過程とよく似ていることに気づく。

### 第三章 自己拡大と自己消滅

A. M. バレネチェアは「アレフ」や「至高の輪」(『神の書跡』)のような宇宙の捉え方を“la posesión angélica del universo”と名付け、それはコスモスと創造者の全的で同時的な啓示であり天使が直感する世界像(intuición angélica del mundo)である、と書いている。そして、「アレフ」におけるあらゆるものの集中した提示の仕方はたぶん聖書とホイットマンに倣ったものであろう、と述べている<sup>40)</sup>。

「ぼく自身の歌」から、

幼い子供がゆりかごで眠っている／ぼくが薄い垂れ布を揚げて長いあいだ見いり、手でそっと蠅を追ってやる／若者と血色のいい娘とがわき道へそれて草木茂る丘をのぼる／ぼくが頂上から覗きこむように彼らを眺める<sup>41)</sup>

それから「ぼく」は血まみれで寝室に横たわる自殺者、病人、群衆、警官、犯罪者等あらゆるものを眺めて「これらのものを（略）心にとめる／心にとめつつ、それからこの場を離れていく」<sup>42)</sup>。さらに他の詩においても「わたしは坐って眺めやる 世界中のすべての悲しみ、すべての抑圧と恥辱を」に始まり、地上に溢れるありとあらゆる苦悩と悲惨を全て見尽くし、最後には「見て、聞いて、そして黙っている」<sup>43)</sup>。この「ぼく」の姿はヴェンダースの天使達となんと似ていることだろう。彼は世界のあらゆる事象を一気に見、聞き、歌い込むのだが、これは正に天上から地上を眺める天使の視座である。

バレネチェアも指摘する通り、『アレフ』にも天使が眺めた地上の光景がある。

なぜならわたしは宇宙のあらゆる地点からはっきりとそれを見たのだ。  
わたしは人のごったがえす海を見た。黎明と黄昏を見た。アメリカの群衆を見た。黒いピラミッドの中央の金色のくもの巣を見た<sup>44)</sup>。

しかしホイットマンは単に天使として世界を高みから眺めていただけではない。次から次へと世界の事象に入り込み、そのものになってはやがてそれを離れ、また新たなものになりかわっていく。作者によって「没入」（流入）と再度の「離脱」（流出）と呼ばれるこの行為は飽くことなく繰り返される。

おお陸地よ、すべてがかくもいとしい君よ一君という存在を（略）これらあまたの歌のなかに手当たりしだいに歌いこみつつ／たといそれがどんなでも我みずからその一部と化して<sup>45)</sup>

ある時は逃亡奴隷を匿い、または彼自身が奴隷となり犬や追手に追われて傷つき、ある時は殉教者、魔女となって辱しめと迫害に耐え「これらすべてをぼくは感じ、これらすべてにぼくはなる」<sup>46)</sup>のである。こうしてホ

イトマンはあらゆる時代のあらゆる物に没入し、全ての瞬間を体感しつつ生きる。

ボルヘスもまた一人の人間が全ての人間であり全ての事象がひとつの物に還元されるという考えに常に立ち返っていった。

ただひとりの不死の人—それがすべての人間である。コルネリウス・アグリッパのように、わたしは神であり、英雄であり、哲学者であり、悪魔であり、世界である<sup>47)</sup>。

ただ両者の違いはホイトマンの没入が常に感覚的で肉体的であるのに対し、ボルヘスのそれは観念的であることである。

ホイトマンのこうした自己拡大には様々な要素が含まれている。広大で将来性に富んだ母国への愛、あらゆる生命に共感と慈しみを感ぜずにはられない優しさ、自虐性、殉教者を装いたという欲求、超個人的な「民主的自我の成長と発展」を歌い新大陸のエピック・ヒーローを産みだそうという使命感。しかし、そうしたものの上にあらゆる時代のあらゆる場所に自らあって全ての多様性をホイトマンという個の内に吸収し、取り入れ尽くしたいという激しい欲望がある。ボルヘスは多様性をおそれ単一化・一元化を目指した。ホイトマンもまた絶えず多から一を志向したが、“要するに彼の神観の動きは多から一へ（略）と動いていく”<sup>48)</sup>。根底にはホイトマンという自己、激しくヒロイックには生ききれなかった自己をどこまでも拡大して全てを体験し我が物にしたいという強い願望がある（どんなものもそれ自身のためそれ自身のもの、男も女もぼくのためのもの<sup>49)</sup>）。なぜなら彼にはひとつひとつ異なる地上の個々の事物が皆輝いて見えたからである（見ること、聞くこと感じること、すべて奇跡<sup>50)</sup>）。森羅万象のかなたに唯一者をみながらも個性を重んじ、個と全体は同一であると説き、全体としての群衆を英雄の高みにまで引き上げる。

ボルヘスは前章で検討したようにホイトマンを個の同一性を否定するうえでの格好の材料としていた。ある対談の中で古くから受け入れられてきた概念である個人の多様性 (la pluralidad de un hombre) の代表として

ホイットマンに言及している。そこでボルヘスはホイットマンがホイットマンという個であるのみでなく全てのアメリカ人、全ての未来の読者でもある、と語り、“decir que uno es muchos, es un modo, digamos, jactancioso, de decir que no es nadie”<sup>51)</sup>と指摘している。多くのものであることはすなわち何者でもないということである。ボルヘスはホイットマンをこうした角度から見つめていた。つまりボルヘスにとってはあらゆるものに没入することは無となることであり完全な自己消滅を意味していた。こうしてホイットマンとボルヘスの間には微妙なずれが生じる。ホイットマンの没入は自己拡大であり、ボルヘスのそれは結果的に自己消滅に至るのである。両者とも多から一へ、全から唯一者へと志向するが、前者は存在の彼方では一に還元される多を全て平等として最高の高みまで引き上げ、後者は無に等しいまでおとしめるのである。もっともそれは誇りある(jactancioso) 転落ではあるが。

ここまでホイットマンとボルヘス両者の天使としての視座と万物への没入を見てきた。両者とも時空を越えることを目指し、あらゆるものの姿を借りて地上に現れ出つつ究極には一者を置いた。だが結果的には二人は違った道を選んだ。ボルヘスが一は多であり、多は一であり、結局のところ全ては無である、といった否定的(本人にとっては肯定的)な場所に辿り着くのに対し<sup>52)</sup>、ホイットマンはより現世的で貪欲で自己肯定的であった。ある意味では自身に対して激しい嫌悪感を抱きながら詩人は強い自己愛をもって空想と想像力を駆使し、貧しい己れに留まることを拒み、躍動する新しい国の現実に自分なりの方法で参加しようとした。詩人ホイットマンと『草の葉』のウォールトはやはりひとつなのである。

### 神の転落と生への参画

ボルヘスは何度か十字架上の死を迎えるイエスの姿を詩に詠んでいる(Lucas XXXIII 『創造者』, Juan I, 14 『他者と自身』, Juan I, 14 『闇を讀める』)。後の二つは聖書の「みことばは人となり／われわれのうちに宿っ

た」に由来する。この「人」は直訳すれば「肉」であり、聖書の中では「肉」は脆い、死すべき人間を指すという。

『他者と自身』に収められた“Juan I, 14”では、「神は巷の人の間を歩きたいと望まれ／ひとりの母より生まれられた／生まれては滅び塵となる他の人間と同様に」と歌う。地上に降りた神には全てが与えられたが、最後には殉教者としての血と嘲笑、釘と十字架が与えられる。『闇を讃える』の“Juan I, 14”では神自身が一人称で語る形をとっている。現在であり過去であり未来であり、全てである神は自らの創造物と交わることを望み (quise jugar con Mis hijos<sup>53)</sup>), 人の子として地上に降りる (nací curiosamente de un vientre<sup>54)</sup>)。ここには天上から降りて地上を経験した者の、初めて世界を見た子供のような驚きに満ちた感慨がある。人の子として生まれた神はそこで様々な体験をする。戸惑い、苦悩、喜び、そして最後には十字架上での屈辱に満ちた死。天上においては自らが全てであり全てを知っていたはずの神がひとりの母から生まれ、肉体を得、人の生を味わい尽くす (bebí la copa hasta las heces<sup>55)</sup>)。かつて知っていたものをも身をもって体験し尽くす。単に天上から見て知ったのではなく、詩の中で繰り返されるように、自らの身体において「しった」(conoci) のである。

ボルヘスはこの、地上に降りる神というテーマに囚われていた。『ユダについての三つの解釈』も、イエスの救済の仕事におけるユダの役割を検証するという形をとりながら同じテーマを扱っている。ニールス・ルーネベルクはその著書の中でユダの裏切りは偶然ではなく、救いという営みにおいて神秘的な地位を占める予定の行為であったとし、神が甘んじて受けられた犠牲に応じるためにひとりの人間が全人類の代表として犠牲を払う必要があったと論じる。それがユダの役割としての第一の解釈であった。

御言葉は肉となったとき、偏在から限定へ、永遠から歴史へ、無限の至福から変転と死へと変わったのであった<sup>56)</sup>。

神が払われた犠牲をルーネベルクはこのように表現している。天上から地上へ、無時間から時間へ、永遠の命から死へ、それは神の転落であった。

ユダの裏切りの第三の解釈においてこの転落は一層速度を増し、よりラディカルになる。

神は完全に人間になられた<sup>57)</sup>。

「完徳と人性とは両立しえない」属性であるから神は罪を犯す愚かな人間の中でも最低の最も恥ずべき行為を行なう人間となられ、人を救われた。つまり自らがユダとなられたのである。神性と最下等の人間の同一、裏切られる者と裏切る者の同一、ボルヘスの好む逆説的な関係がここにある。

ボルヘスはなぜ転落する神のテーマに拘わったのか。この物語を読む者は皆ルーネバルクの（ボルヘスの）ユダに対する共感と優しさを感じずにはいられまい。地上に降りた神はその豊かさとともに地獄もまた経験しなくてはならない。人であるということ、受肉するということはそういうことなのである。しかもその転落、下降が急であること激しくあることには目眩にも似た快感がある。神の救済を完成させるため最低の汚名を一身に引き受けるユダの姿は戦場での戦いの後、孤独な非業の死を迎える英雄達（神ではない死すべき人間）の姿と重なり、天使として全てと無関係に見てきただけの在り方をやめ、地上に降りて死を前提とした只一度きりの生を生きようとしたボルヘスその人の姿ともまた重なる。

地上に降りようとするボルヘスの試みは他の作品にも頻繁に見られる。前にも触れたがモネガルは『南部』と『結末』をペロンと正面から闘って倒れたいというボルヘスの願いの現れと考えた。モネガルはボルヘスと共に講演を行なったある講演会の後、連れ立って食事に出た折にボルヘスが激しく熱しながら祖父等の敵であったロサス将軍への憎しみを語るのを見る。ボルヘスの中でロサスはペロンとひとつであると感じ、両者に対する憎しみの中にその憎しみと同じくらいに大きな賛嘆の思いを見るのだった。

両者ともボルヘスがナイフや牛追い棒を持った男達に対して感じていた魅力のメタファーであった。(略) ボルヘスは彼らを軽蔑しながら、賛美せずにはいられなかった。十分に生ききっていないという固執観念に囚われ、ボルヘスはそうした行動の男達の中に書物の人である自分の対照を見るのである<sup>58)</sup>。

敗血症で瀕死の病床に横たわっているダールマンは生ききれていない天使としてのボルヘスの姿であり、ナイフを手に決闘に向かって平原に出ていくダールマンは十分に生きようと一気に飛び降り、地上の人間になろうとする転落する天使の姿である。

『結末』は『南部』と同一のテーマの一変奏である。突然の発作のために半身不随となった食料品店の亭主レカバレンの姿は瀕死のダールマンと重なる。病床のダールマンの心中を表現した文章「この何日間のあいだ、ダールマンはすみずみまで自分を嫌悪した。自分であることも、大小便も、屈辱も、顔の上に逆立っているひげも憎かった」<sup>59)</sup>と、動けぬレカバレンが抱いている思いを表した文「長々とねそべったまま、レカバレンは半ば目を開いて、傾いた蘭草の天上を見た。(略) 少しづつ、彼は現実、つまり、もう、けっして変わることはない日常の些事にもどっていった。彼は別に悲しみもせず、自分の大きな役たたずのからだを、粗毛のポンチョに包まれた両脚を見つめた」<sup>60)</sup>を比べてみる。どちらの場合も、動かぬ、不自由な肉体への嫌悪が表されている。この嫌悪の思いはボルヘスの自らの肉体への嫌悪、及び、現実の己れの生への嫌悪そのものであろう。寝そべったままのレカバレンは半分開いたドアの向こう側で繰り広げられる二人の人物（マルティン・フィエロと黒人）の言葉のやりとりに耳を傾けている。黒人は七年前に兄を殺した仇であるフィエロを探して復讐の旅を続けていたが、ついにその日の午後、決着をつけるチャンスが巡ってきた。エルナンデスの作品では、黒人とフィエロは唄くらべの末決闘になりそうになるが、周りのガウチョに止められ、その場はまるくおさまることになっている。だがボルヘスの短編では黒人は闘いの末、フィエロを倒して兄の復讐を果たす。二人の決闘とフィエロの死は、闘えぬレカバレンの願望が生んだ幻想とも考えられる。「夕日に照らされた平原は、まるで夢の中で見るように抽象的な印象を与えた」<sup>61)</sup>という文はこのエピソードの幻想性を暗示しているように思える。フィエロはレカバレン自身の空想の姿であり、立ち上がることさえできない彼は、男らしい闘いのうちに倒れ、

死することを願う。これはボルヘス自身の自殺願望にもつながる。ダールマンと同様、レカバレンの動かぬ肉体は十分に生きていないと感じているボルヘス自身であり、彼は空想の中で、黒人の復讐の闘いを潔く受け入れて倒れるフィエロとなって地上に降り、ただ一回きりの人生を男らしく閉じるのである。

最後に『もうひとつの死』の主人公ダミアンに触れたい。1904年の革命で臆病に振舞ったダミアンがその後故郷に帰って過ごした40年間の牛や羊を相手にした生活は自分の身には何も起こらない天使の生であり、死の床で実現させた勇猛な死はそこからの一気のジャンプであった。同じ戦いを二度、しかも異なった形で戦ったダミアンの謎には幾つかの解釈が可能だったが、ウルリーケ・フォン・キュールマンの推測は次のようなものであった。ダミアンは1905年の戦いで実際には死んだがその前にもう一度故郷に帰してくださいと神に頼んだ。神は頼みを聞き入れ、死んだ若者の霊のみを帰郷させた。

こうしてエントレ・リーオスの若者の霊が故郷に帰ったのである。帰ったにはちがいないが、霊の身であったことを忘れてはならない。それは、女もなく友もない孤独の中に生きた。それはあらゆるものを愛し、所有した。しかし距離をおいて、あたかも鏡の向こう側からのようにそうしたのである<sup>62)</sup>。

この霊の生活がこの論文で扱ってきたボルヘスの在り方にどれ程近いか、驚くべきものがある。肉体を持たない霊はあらゆるものを所有し愛することができた（天上から地上を眺める天使のように）。しかし何ひとつ全的に所有できなかつた。霊である彼は実際にそれらに触れ、やがては失うかもしれないという可能性に怯えながらそれらを体験することを敢えて望まなかつたからである。

## 結び

ダミアンのように過去を造り変えることができたなら、とは多かれ少なかれ誰もが抱く願望ではないだろうか。おそらく、ボルヘスも幾度か切実に

そう願ったはずである。しかし、私達の運命は「不可逆不変であるがゆえに恐ろしい」<sup>63)</sup>のである。ならば、せめて全的に忘れることができたら、どんなにいいだろう。しかし、忘れ去るということは本当に難しい。それならば、生きて意識を持ちつつ自らを救っていく道はひとつ、という気がする。創造することである。ボルヘスもホイットマンも砕かれた夢を作品に託すことで「エントレ・リーオス州に帰った霊」のような情けない在り方に別れを告げようとした。だからといって彼らの人生が修正されるわけではないが、ただ、その作品に触れて私達は何らかの感慨や慰めを感じるのだから、そこには彼らの「不死性」があるのである。大戦の戦場で『草の葉』を抱いて涙する詩人達の中に、そして今日ボルヘスの詩を読む私達の中に確かに彼らは立ち現れつつあるのだ。

## 注

- 1) 蓮実重彦, 柄谷行人『闘争のエチカ』河出書房新社, 1994 p.10
- 2) ボルヘス J. L. 『永遠の歴史』筑摩書房 1986, 33-36頁。
- 3) *mème/ borges* 第2号, 水声社, 1975, 39頁。
- 4) *Ibid.*, p.39.
- 5) E. R. Monegal, *Borges una biografía literaria*, Fondo de Cultura Económica, 1987, p.361.
- 6) その女性は Beatriz Bililóni Webster de Bullrich. María Esther Vázquez も著書 *Borges Esplendor y derrota* (Tusquets Editores, 1996, pp.143-144) においてこの二編の英語の詩について幾つかの解釈を試みている。
- 7) *Entrevista 80 años*, Fondo de Cultura Económica, 1979, p.108.
- 8) J. E. Miller Jr., *Walt Whitman*, Twayne Publishers, 1962, p.15.
- 9) 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』研究社, 1973, 21頁。
- 10) 同上31頁。
- 11) 同上32頁。
- 12) 同上33頁。
- 13) W. ホイットマン『草の葉』(中), 岩波書店, 1991, 292頁。
- 14) 同上292頁。
- 15) 同上292頁。
- 16) 同上293頁。
- 17) 同上293頁。

- 18) 同上293頁。
- 19) 亀井俊介, 前掲書, 38頁。
- 20) 同上68頁。
- 21) 清水春雄『ライラックの歌ーホイットマンの教説』篠崎書林, 48頁。
- 22) 亀井俊介, 前掲書, 206頁。
- 23) *Borges Obra poética 1923/ 1977*, Alianza/ Emecé, 1987, p.67.
- 24) *Ibid.*, p.67.
- 25) *Ibid.*, p.67.
- 26) *Ibid.*, p.239.
- 27) *Ibid.*, p.376.
- 28) 亀井俊介, 前掲書, 参照。
- 29) リチャード・バーギン『ボルヘスとの対話』晶文社, 1973, 213頁。
- 30) *Borges Obra poética 1923/ 1977*, *op. cit.*, p.492.
- 31) Borges, J. L. *Obras Completas*, Tomo 1, Emecé Editores, 1989, p.251.
- 32) *Ibid.*, p.252.
- 33) *Ibid.*, p.252.
- 34) J. L. ボルヘス『ボルヘス, オラル』, 風の薔薇, 39-63頁。
- 35) 大石紀一郎「〈モデルネ〉の両義性と非同時性」(『モダニズム研究』思潮社1994) 63頁。
- 36) 同上56頁。
- 37) 亀井俊介, 前掲書, 185頁。
- 38) 河中正彦「言語危機論」(『モダニズム研究』 *op. cit.*, p.226)
- 39) 同上227頁。
- 40) A. M. Barrenechea, *La expresión de la realidad en la obra de Borges*, Centro Editor de América, 1984 pp.65-66.
- 41) W. ホイットマン, 前掲書 (上), 113頁。
- 42) 同上114頁。
- 43) 同上 (中) 221-222頁。
- 44) J.L. ボルヘス『世界の文学ーボルヘス』集英社, 243頁。
- 45) W. ホイットマン『草の葉』(中), 21頁。
- 46) 同上21頁。
- 47) J. L. ボルヘス『世界の文学ーボルヘス』, 146頁。
- 48) 清水晴雄 前掲書を参照。
- 49) W. ホイットマン (上), 112頁。
- 50) 同上149頁。
- 51) *Entrevista 80 años*, pp.116-117.
- 52) Julio Woscoboinik は「アレフ」に見られるような一点に全てを集約し

ようとする試みを生むボルヘスの心性を、できるだけ長い間（永遠）にあらゆることを手に入れたいという強い欲求であると解釈し、この「一見冷たく知的で禁欲的な」作家の中に「ドラマティックで激しい情熱、欲求」を見ている（*El secreto de Borges*, Editorial Trieb, 1988）。このように考えるとボルヘスとホイットマンはより接近する。

- 53) *Borges Obra poética 1923/ 1977* p.319.
- 54) *Ibid.*, p.319.
- 55) *Ibid.*, p.320.
- 56) J. L. ボルヘス 『世界の文学—ボルヘス』, 116頁。
- 57) 同上118頁。
- 58) E. R. Monegal, *op. cit.*, p.384.
- 59) ボルヘス J. L. 『世界の文学—ボルヘス』, 127頁。
- 60) 同上120頁。
- 61) 同上121頁。
- 62) 同上185頁。
- 63) J. L.ボルヘス 『異端審問』, 晶文社, 1982, 273頁。